

研究ノート：高山英華伝・覚書

-その冒頭として-

Notes on the Biography of Prof. Eika Takayama

東 秀紀 *
Hideki Azuma

摘要

高山英華（1910-1999）は、①東京オリンピック、日本万国博覧会(通称:大阪万博)、札幌冬季オリンピック、沖縄海洋博覧会、国際科学技術博覧会（通称:つくば博）など戦後日本の国家的イベント施設の基本計画、②高蔵寺、多摩、筑波研究学園都市等のニュータウンや八郎潟の新農村開発計画、③新都市計画法、地区計画制度の創設、④東京大学都市工学科の設立等において主導的役割を果たした戦後日本都市計画の巨人である。審議会・委員会の会長・委員長といった形の関わり方が多く、まとまった著書も『私の都市工学』一冊のみであることから、業績については疑問を呈する向きもあるが、戦後日本、とくに高度成長時代の都市計画を高山抜きに語ることはできない。

筆者はそうした高山の伝記『東京の都市計画家:高山英華』（鹿島出版会）を執筆中であり、2010年4月刊行される予定である。以下はその草稿の冒頭である。

I. はじめに

江國香織に、『いくつもの週末』¹⁾ というエッセイ集がある。

冒頭にあるのが「公園」だ。

薄い文庫本で、「公園」は6頁くらい。それも1頁で13行しかないから、数分で読み終えてしまう。

だが、内容は美しくて深い。たとえば、書き出しはこんなだ。

《大きな公園のそばの小さなマンションに引越して2年になる。春には近所じゅうに溢れるように桜が咲き、秋には黄紅葉がいい音で風に揺れる、きれいだけれどちょっと不便——駅が遠く、食料や日用品を買うお店も遠い——な住宅地だ。駅が遠いというのは、つとめ人である夫にとっては随分不便なことだろうと思うのだけれど、しずかだし、散歩には好都合だし、近くにおいしいレストランがいくつもあるし、私は気に入っている。

ここでの生活は、だいたいにおいて少しかなしく、

だいたいにおいて穏やかに不幸だ》

作者は若く結婚したばかりだが、人生にひそむ悲しみをすでに知っている。逆に若いからこそ、感じとれるのかもしれない。たとえば引用した最後の行の文章が好例だが、さらに読み進むと、

《公園は、季節や曜日や時間帯によって、全然ちがう顔をしている》

と、ある。

朝の公園は空気が澄んで、まだ誰も吸っていない酸素にみち、一番気持ちがよくて、世界中が冷たく湿っているようだ。

一人になりたくて、ときどき夜の公園にも足を運ぶ。楽器を練習している人のトランペットやクラリネットを、歩道橋の上に立って聴いていると、夫と喧嘩して荒んでいた心が穏やかに回復する。

だが、作者が一番よく足を運ぶのは、やはり子供たちと若い母親、老人と犬の散歩が行き交う平日の昼らしい。そこで著者はお気に入りの「ぶた公園」（豚を飼っているわけではなく、オブジェがあるだけ）の小さなベンチで、読みかけのミステリーを広げる。

そんなふうには色々表情は変えるけれど、公園はいつも「空の高さや空気のつめたさ、葉の揺れる音や木の枝の美しさ、季節の推移や雨の匂いを頭上にひろげ

* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 観光科学域
教授
〒192-0364 東京都八王子市南大沢 2-2 パオレビル 10 階
e-mail: h.azuma@tmu.ac.jp

ていてくれる」。

こんな見事なエッセイを読むと誰もがこの公園に行ってみたくなる。少なくとも、公園がどこか知りたくなる。

謎を解く鍵は「ぶた公園」だろう。どこかで、豚の置物が滑り台や砂場の間に置かれているのを見たことはないだろうか。同じように「うま公園」も書かれてあるから、両方をたどっていけば分かりそうだ。

あるいは「犬の散歩」というだけで、ほぼ察しがついたか。東京広しといっても、犬を連れて散歩する人が多いといえば、この公園の右に出るものはないのだから。

そう、それは駒沢公園——正式に言えば、駒沢オリンピック公園である。

II. オリンピックの時代

正式名称が示すとおり、駒沢公園が（以下、簡略化してこう呼ぶ）現在の姿になったのは、1964（昭和39）年東京オリンピックのときからである。大正の初めころ、農地からゴルフ場に開発され、防空緑地として都に買い取られた戦争中を経て、戦後は都立駒沢緑地総合運動場となった。といっても、プロ野球のスタジアムがあるほかは、バレーボールコート、ハンドボール場、ソフトボール場、弓道場などが点在し、残りは赤土のままアマチュア用軟式野球場として使用していたにすぎなかった。

それがオリンピック第2会場として整備されたのである。陸上競技場、体育館が建設され、バレーボール、サッカー、ホッケー、レスリングの4種目が行われた。とくに日本女子バレーボール・チームの金メダル獲得は有名である。

オリンピックのあとはプール、サイクリングコースなどが加えられ、12種類の運動施設をもつ現在の姿になった。

広さは公園全体で40ヘクタールを越え、ジョギングやウォーキングなどに興ずる人々も多い。とくに散歩道は、犬に関心のない人でさえ、注意を払って見てしまうほどだ。オリンピック当時、日本は未だ貧しかったから、こんな風景が日常的になるなんて、誰が予想しただろう。

1960年代は、貧しいながら日一日と生活がよくなっていると人々が信じた、あるいは信じようとして自らを鼓舞した時代だった。それは経済活動だけではなく、都市計画分野でも当てはまり、計画への意欲と信頼が

満ち溢れていた。

都市計画を行う障害となっていた土地や予算といった問題が、オリンピックという錦の御旗によって取り除かれた。「プランを描くのは結構だが、実現は大変ですよ」と同僚に脅かされて担当になった技師が「そんなことはなかった。オリンピックといえば、だいたいが解決した。地権者も役所内も」と回想するのを聞いたことがある。それは都市計画に携わる者が長年夢みた状況だったのだろう。

成果として、東京は大きく変わった。中央線が高架になり、高速道路が都心を縦横に走り、地下鉄が網の目のようにつながった。米軍駐留地ワシントンハイツが返却されて代々木公園になり、表参道は拡幅されて、おしゃれなブティックが建ち並ぶ街になった。庶民の家でも、トイレが水洗になり、テレビや洗濯機ばかりか、クーラー、自動車も備えつけられた。若い女の子が欧米高級ブランドの衣服や小物を身につけ、日本人の大多数が自らを中流だと感じる時代が到来した。

今から思えば、東京オリンピックとは豊かさへの始まりであり、駒沢公園はそのときにつくられたのである。

建設というなら、1990年前後も、東京の各所に槌音は鳴り響いた。が、そのときもたらされたのは空しく悲惨な結末だった。刹那的な利益と快楽を追い求め、長期的な視野や良いものをつくらうという理想を忘れた日本人は、バブルがはじけたのちも、未来への指標を見出せないでいる。

III. 駒沢公園の魅力

駒沢公園の魅力の秘密は、個々の施設よりも、全体としての構成にあるだろう。

まず人は何といっても、緑のボリュームに驚く。「とにかく広い！」と公園のホームページにあるように、40ヘクタールという敷地面積は半端ではないし、さまざまな大木、高木、森が連なり、園内各所に設けられた花壇には四季折々の花が咲き誇っている。そして散歩したり、ジョギングしたりする人の何と多いことか。まさにホームページにあるように「住宅街のなかにあつて……子供からお年寄りまで楽しめる緑豊かな公園」に違いない。

公園をめぐるループ状の主要園路を行くと、施設が木々の間から見える仕掛けも、緑の森を実感させる。巨大な樹木が多いが、当時少年だったわたしの記憶では、オリンピック開催時からそうであった。

——既存大公園の植栽に匹敵しうるよう、スケールの小さい植栽を排し、樹木なども巨大なものを使用すること。

というのが設計の基本方針で、最初から樹木が鬱蒼と茂っているように企図されたのである。

植栽も均等に植えるのではなく、ある地区に高木を集中させ、芝生広場、休養園地のなかに、第二球技場、補助競技場、硬式野球場などが散在している。

そんな「園地エリア」に対し、競技場、体育館など、オリンピック施設が配置されている「広場エリア」の床は、打って変わって舗装されている。

実はこのエリアが、駒沢公園の正面にあたる。

公園を計画するとき、正面玄関をどこに置くかは設計上最大の問題であった²⁾。

というのは広さに比べ、補助 127 号線、補助 154 号線などの道路と接する長さが短かったからである。そこで残る補助 49 号線（現在の駒沢通り）を直線に改良・拡幅して、接する地区を正面とした。しかも、このままでは敷地が分断されてしまうので、49 号線を 5 メートルほど下げ、その上に連絡橋を架けてつなげた。「公園」に出てくる「わたし」が夜一人クラリネットやトランペットの音を聞く歩道橋とは、この連絡橋である。

車から降りた人は広い石畳の階段を、約 2 万平方メートルの中央広場に向かって上っていく。すると五重塔のような形をした管制塔の先端が、階段を上につれ徐々に見えてくる。小さな塔が大きな体育館より印象的なのはこのためだ。

広場からは全施設を展望でき、右側に陸上競技場、左側に体育館がある。両施設の間には緑の植え込みを背景にして、管制塔、池、噴水、花壇などが設けられ、競技場周辺には 4 千平方メートルの大刈り込みなどもあって、コンクリートの固い印象を緩和している。

このように、駒沢公園は、道路、橋といった土木分野、体育館、競技場などの建築分野、そして公園の造園分野という、3 つの分野が一つのコンセプトでデザインされているところに特徴がある。

こうした作業を、果たして何と呼ぶべきだろうか。

造園だけでもなく、体育館や競技場、道路、橋の設計だけでもない。むしろそれらすべてを含み、全体としてまとめあげるデザイン。専門用語でいうと、アーバンデザイン、ランドスケープ・アーキテクチャ、景観デザイン……などが思い浮かぶが、それぞれ微妙にニュアンスが異なり、わが国では未だ名前も定着していない。公園のデザインだからランドスケープ・ア

ーキテクチャが最も適当だと思えるが、施設だけでなく、オリンピック以後の使い方や事業計画なども含まれていたことを思えば、広く都市計画と呼ぶべきかもしれない。

いずれにしろ、駒沢公園のように複数の専門分野がからみあう作業は、スケールがあまりに大きすぎ、起こってくる問題も多岐にわたる。だから、むしろいろいろな分野の専門家が一同に会し、協同して行くことが必要である。

かといって、統一したポリシーがないままでは混乱してしまう。大プロジェクトを実施するには、さまざまな専門家が集合するとともに、一つのコンセプトにまとめあげるリーダーシップが必要だ。各メンバーが個性を発揮し、自由にプレーしながら、それらをまとめる、ちょうどサッカーのキャプテンのような人が。

そして駒沢公園の計画でそうしたキャプテン的役割を果たした人こそ、高山英華なのである。

IV. 高山英華の人物像

高山英華は当時、東京大学の都市工学科という、出来たばかりの学科の教授だった。

建築出身とはいっても、いわゆるアーキテクトでもデザイナーでもない。彼が実際に描いた図面で残っているのは大学の卒業設計だけ、それも漁村の計画である。

そのかわり、東京をはじめとする都市計画関係の多くの審議会・委員会で、会長、委員長、委員を務めた。

その数は多い。

『高山英華先生年譜』³⁾ は喜寿を迎えたのを記念して弟子たちが編纂した薄いパンフレットだが、昭和 22 年から昭和 62 年までの 40 年間で、国・自治体・学会など公的委員会に携わった回数は 100 以上に及んでいる。

国土総合開発審議会や防災会議で指導的役割を果たし、高蔵寺、筑波研究学園都市などのニュータウン開発、東京オリンピック、札幌冬季オリンピック、大阪の日本万国博覧会、沖縄海洋博覧会、つくばの国際科学技術博覧会などのイベント施設基本計画にも携わっている。

文字通り、戦後日本都市計画の中心人物だった。

おそらく周囲から担がれやすい人だったのであろう。建築学科の初代教授辰野金吾をはじめ、東大には歴史上、さまざまのボスが存在するが、高山もまた良い意味でのボスであった。都市計画のように、さまざまの

セクターが対立しがちな分野では、理想論だけをいっても成り立たない。だが、単なる調整だけでは良いものはできない。そこに都市計画の難しさがあり、指導力ある委員長が必要となるので、高山はまさに適任者であった。

それは学者としての能力とともに、彼の人間性から培われたリーダーシップによるものであったろう。

だが、おそらくこのように多くの委員長を務めたことが、高山英華の業績と人物像をわかりにくくもさせている。親分肌の反面、照れ屋であったらしく、自伝のようなものは著さなかったし、戦中派のこだわり故か、叙勲を強く固辞しつづけた人でもあった。

だから、人物像を調べようにも、唯一の著書といてよい『私の都市工学』⁴⁾と、磯崎新、宮内嘉久がそれぞれ行ったインタビュー^{5) 6)}しか見当たらない。論文も多くが連名で、単著で発表されたものも弟子が下書きしているようだ。だから、高山の業績をまとめると「さまざまな委員長をつとめた人」になってしまう恐れさえある。

高山はその「委員長」の役割を見事に果たし続けた。晩年に描いた絵などを見ると美術的才能がなかったとは思えないが、建築学科教授でありながら、アーキテクトとしてではない道を、人生のどこかで定めたのであろう。そしてむしろ他人に図面を描かせながら、自らは戦後日本の都市計画をリードしていったのである。

しかし、そんな彼でも時には自身の手でデザインしたいと考えたときもあったのではないだろうか。そしてそれを望みどおりに実現したときが。

結論からいうと、駒沢公園こそ、彼が強い思い入れをもって自ら計画し、実現した数少ない例のように思われる。

駒沢公園の基本計画は昭和36年2月に、東京都が高山を中心とした研究会に委託する形ではじまった。研究会メンバーは高山のほか、造園の横山光雄、土木の八十島義之助、建築の芦原義信、村田政真といった専門家と、東京都の役人も加わっていたようである。

図を描く中心は秀島乾という人で、戦前に早稲田大学建築学科を卒業するや、満洲に渡って、都市計画に腕を奮い、戦後は日本に帰って渋谷に小さな事務所を構えていた。後に秀島が亡くなったとき、高山は彼を「日本で最初のプランナー」⁷⁾と追悼している。

だが、駒沢公園では、秀島だけでなく、高山自身も珍しく絵を描いたらしい。

それは設計というより、もっと前の段階、つまりエスキースやコンセプト図だった。

高山はそうしたエスキースを何度も描き、秀島や高山研究室の大学院生だった加藤隆が正確な計画図へと描きなおしていったというのが真相のようである（筆者の加藤明治大名誉教授からのヒアリングによる）。

他人の図面を審議することに徹していた高山には、珍しい肩の入れようだった。

何故これほど駒沢公園に熱心だったのだろうか。

実は、高山英華は学生時代、サッカーの名選手とならし、ベルリン・オリンピックの代表候補にもなっていた。運悪く、出発直前に盲腸を発病し、ベルリンには行けなかったが、そのときの日本チームは優勝候補のスウェーデンを破ったことで有名だ。

よってオリンピックというとき、彼にはサッカーへの思い入れが強くあったに違いない。しかも、代々木や国立競技場と違って、駒沢こそサッカーの試合が行われる予定地であった。

単に他人が描いた図面を審議し、意見をまとめるだけでは辛抱できない何か、彼をとらえていたのだ。

しかも、対象とする駒沢公園の敷地は40ヘクタール以上に及び、建築、造園、土木といった各専門分野だけではとらえきれない都市計画が必要であった。

ここに、高山がそれまでの自分の役割であった「委員長」という立場を越え、駒沢公園の「ランド・デザイナー」たらんとした理由がある。

《駒沢公園はまさに土木と建築と造園とが力をあわせてやればいいものができるというひとつのモデルケースになったのです。僕にとっては都市計画を考える上での理想をはじめて実現化した思い出深いプランです》（「理想の都市計画」『追想』⁸⁾）

と語っていることから、駒沢公園が高山英華の、まさに「会心の作」（同）だったことが伺える。

いまま駒沢公園が人々に愛されているのは、こうした高山がもっていた熱意と人間性が、各所に刻印され、如実にあらわれているからであろう。

V. まとめ

戦後日本の、とくに東京の都市計画において、高山英華が果たした役割は大きい。

その多くはやはり委員長を多く務めたということに帰せられよう。しかし、駒沢のように調整的役割を越え、自らランド・デザインを描いたことにおいても、評価されるべきのように思われる。

そうしないと、高山英華の実像と業績の本質をつかむことは難しい。

近代日本の成立後、首都となった東京には今日まで幾人かの有力な「都市計画家」があらわれた。維新直後に銀座煉瓦街を実現した東京府知事由利公正、市区改正計画をまとめた内務大臣芳川顕正、民間の力で田園調布を建設した渋沢栄一、関東大震災後の帝都復興事業を指揮した後藤新平、そして戦争中から昭和 20 年代の復興期まで東京の計画を描きつづけた土木技師の石川栄耀。

彼ら先輩たちと並んで、戦後日本の高度成長時代において、都市計画のさまざまな会長・委員長をつとめ、他方で駒沢公園に見るようなグランド・デザイナーの役割を果たした高山もまた「東京の都市計画家」というにふさわしい。

現在の東京は、駒沢公園をはじめとする東京オリンピック施設、中央線沿線の駅前開発計画、多摩ニュータウン、新国立劇場など、高山の業績の上になりたっている。その意味は、筑波研究学園都市や大宮ソニックスシティなど、広く東京圏を加えれば、更に明らかだろう。

そして高山が都市計画中央審議会長として創設した地区計画制度が、市民たちの自ら住む都市や環境を考えようという「まちづくり」の動きへと発展していったことも忘れてはなるまい。

今や高山英華が東大教授を辞し、都市計画の第一線から離れて 30 年近く、そして実際に亡くなってからも 10 年を経た。その間にも、東京はグローバリゼーション、バブル経済とその破綻、そして 21 世紀と、大きな変貌をいまも経験しつづけている。

戦後——すなわち 20 世紀後半の東京計画とは如何なるものであったのか。そしてそれはどこから、どのようにして生まれ、どこに行こうとしているのか。

その答を知るために、高山英華とその業績を、いま振り返ってみることが必要である。

(以下、続く)

参考文献

- 1) 江国香織 1997 『いくつもの週末』世界文化社
- 2) 高山英華・加藤隆 1964. オリンピック東京大会における総合施設計画. 新建築 1964 年 10 月号. pp.118-123.
- 3) 高山英華先生喜寿記念事業を進める会 1977 『高山英華先生年譜』非売品.
- 4) 高山英華 1987 『私の都市工学』東京大学出版会
- 5) 高山英華・磯崎新 1976. 近代日本都市計画史. 都市住宅 102: pp.4-111.
- 6) 高山英華・宮内嘉久 1997 『都市の領域：高山英華の仕事』建築家会館.

- 7) 高山英華 1973. 秀島乾氏に哀悼の意を表します. 都市計画 74: p. 67.
- 8) 高山英華 n.d. 「理想の都市計画」高山英華を偲ぶ会編 2000 『追想』 p. 25.

(投稿：2009 年 12 月 12 日)

(受理：2010 年 1 月 8 日)